

日あらはれたことはまことに愉快であります。諸君も専門の先生方の批評を聞けば満足に思はれるでせうが大事なことは満足すると言ふ事でありませう。力が認められ評判が良いこと、これは満足すべきことでありませう。しかし、やゝもすれば満足し、自惚れていゝ、氣になり、その先がのびなくなると言ふ場合をひき起しやすしい。

満足しなければ愉快にはなれない、しかし、それだけではいけない。俳句で有名な芭蕉の言つた言葉に底を入れて底をぬくと言ふ言葉があるが、一升樽に底があれば一升だけしか入らないでそれから先の大きさは望めない。

自分の藝術がある程度進歩し満足すればその人は樽に底を入れた事になるのびない。芭蕉は俳句で底を抜け自分の藝術に底を入れるなど言つてゐるがそれは單に藝術のみならず學問でも同じで、底を抜いて分量を無限大にするやう努力して貰ひ度い。音楽學校を卒業する人は世に出で少し優秀だと世間がちやほやし、マネジャーが追ひかけて、北海道や九州へ引張りまわし、當人は世の中の人が歓迎してくれるのでうれしさにつりこまれ満足するとともにいゝ氣になり、自分の藝術に底を入れる。卒業の時學校では優秀だった人も情落するし、折角學校時代未來ある人と囑望された人がいつのまにか世間に棄てられるやうになるからよく／＼警戒され度い。

結局藝術をやる人は一方いゝ氣にならねば進歩しないことは勿論だが自分が全力を盡し努力した結果認められ優秀だといわれることは、満足すべきことではあるが、それにとどまてはいけない。

牛が一度に食べたものを少しづつ、出しては食べるが、自分の評判を食するだけに氣をくばり、自分の何時もめがける理想をないがし

ろにしては到底その藝術は進歩しない。

どうか一度は満足しても良い世評を迎へても良いが、自分で底を入れるやうなことはしないやう注意され一歩／＼理想に近づくやう努力して貰ひ度い。卒業後も絶へず自分を返り見てその道に精進して貰ひ度い。

漱石は五十で死んだがその年に或若い二十台の禪坊主の生活態度を見て、自分は馬鹿で貴方のやうに道を極めることが出来ず恥しい、自分のところに来る若い弟子はあなたにくらべると全く駄目だこれでも自分が愚かで弟子を向上させ得なかつたためにかうなつたことは恥しいと手紙にかいてあつたが、あの位日日努力した人でさへも自分の精進の到らないため弟子を感化出来なかつたとその人の前で反省してゐる。若い人達にこのことを良く考へて貰ひたい。彼の偉い所はそこにある。彼は底をとつて高いところをめざし日日努力を怠らなかつた。

どうかこう言ふ例も近くにあるのですから、諸君もよく／＼精進して下さい。満足すべき時に最後の注意を申上げのびる諸君の前途を祝ふ言葉にかへたいと思ひます。

昭和二十四年二月廿五日 於 奏樂堂

(手書き)

(昭和二十三年度 第六十回卒業式並修了式一件書類)

(十)「母校だより」(『同聲會報』より)

母校だより(昭和二十二年)

最近約一ケ年間の母校に關する主なニュースをお傳えます。

昭和二十二年三月二十九日午前十時から第五十八回卒業式舉行。

卒業者は本科聲樂部二一名、器樂部三八名、作曲部四名、聲樂部外國人依<sup>ト</sup>托學生一名、師範科三九名。午後一時から卒業演奏を行う。

出演者各部合計二〇名。來會者の感想、新聞批評等を總合するに、終戦後の深刻な現實の中でこれだけの成果をあげ得たことに對して極めて好意ある反響があつたように感じられたのはわれわれの悦びとするところであつた。なお、これに先立ち學友會は、

二十六・七兩日

本年度卒業生を出演者として奏樂堂に於いて演奏會を催した。

三十一日—四月七日 入學試験。

四月二十一日

入學式及び始業式を舉行。本年度志願者數と入學者數は左の通り

本科	(志願者數)	(入學者數)
(洋樂)		
聲樂	五二	一三(うち特別入學二)
ピアノ	五四	九
オルガン	二	一
絃樂	一五	四
管樂	一〇	三
作曲	八	三(同じく一)
(邦樂)		
能樂	二	一
箏曲	一〇	三
長唄	三	一

三味線 四 一  
(本科合計 一六〇) (三九)

師範科

男 一八 四

女 一〇一 三二

(合計 一一九) (三六)

受験者及び入學者の實力の程度ははゞ戦前に復歸し、科によつては戦前の水準をしのぐものもあるのは心強いことである。たゞ、師範科の男子が十五名の募集にもかゝらず、ようやく四名の入學者しか得られなかつたのは、まことに残念なことであつた。種々な事情から師範科男生徒の増員は緊急な要請となつていたので、同聲會員諸氏におかれても優秀な男子の志願者を一人でも多くお送り下されることを切にお願い申しあげる次第である。

この新學期から、學校長の指導に従い、重要校務の運営は各部會を言わば小委員會とし、それと毎週木曜日に定期的に開催される全員出席の教授會とに於いて充分検討の上、學校長の採決を経て實施されると言うデモクラティックな態勢がととのえられ、今日に至つてゐる。

また、今學年度から師範科に増課の制度が實施された。これは同科の第二學年以上には希望の課目(聲樂・器樂・作曲)の授業時數を本科の各専修課目なみに増加し、從來よりも深く研究させるもので實質的には本科の専修と殆ど等しい取扱いとなるわけである。

二十六日

東大の宮澤・吾妻兩教授を招き新憲法精神普及特別講義を行った。

五月

三日

憲法普及會の要請により、本校生徒全員が新憲法實施記念行事に参加した。即ち午前は宮城前の式典に信時潔作曲の式典歌を合唱、午後は帝國劇場に於ける記念祝賀會に出演、風巻景次郎作詩、長谷川良夫作曲の交聲曲「偉いなる朝」を合唱した。なお、この演奏には横田（四家）、柴田、中山（悌）の各教官及び研究生一名が獨唱者として參加した。

七月

五日

學友會演奏會。この一部を中繼放送した。

九日—十二日

本入學試験。本科聲樂部に一名不合格者があつた。

十四日—十九日

學期試験。今回から新制度として、本科四年生に對してはいわゆるオーディション式の試験方法を採用することゝなつた。この方は前年の秋ごろから各部會、教授會、事務當局者で慎重に研究しつつあつたもので、演奏はもとより、作曲の方も可能なかぎり奏樂堂で演奏し、全教官、全生徒參聽の中で當該科目の試験委員の教官が採點を行い、その後で批評會を開いて教官と生徒とがへだてなく意見を述べ合い、今後の研究に資するのである。

七月二十日から夏期休暇に入つたが、今年度は一つの試みとして夏休みを短縮し、その日數だけ冬休みを長くすることゝなつた。これは、冬期は本校の學習には殊に不適當なことを考慮したのである。

九月

一日

第二學期始業。懸案であつた本校管絃樂部の再建は、種々な惡條件の爲に難航を見ていたが、關係各教官の努力によりようやく新構想成り、今月から教官・部員・生徒による管絃樂部の定期練習が開始された。

また、今回、本校教官として同聲會員諸氏にもおなじみの深かつた風巻氏が本校を去られ北大で國文學を講ぜられることゝなつた。

二十五・六日

二十六日研究科修了式舉行。卒業演奏は邦樂が二十五日に洋樂が二十六日に行われた。何れも本校傳統の眞摯・純眞な演奏によつて好評を得た。

十月

一日

本日から二ヶ月間、文部省の要請に基き、開放講座を開いた。各科に互り全國から集る者一三二名。

五日十二日

學友會の發案のもとに學校當局及び全教官が全面的に協力し關東水災義金募集音樂會を開催した。五日は邦樂、十二日は洋樂で教官生徒の出演、其他全校一致の努力により税金を除き義金として約二

萬二千圓を得、一萬圓を學校内の罹災者に贈呈、邦樂・洋樂それぞれ約六千圓を東京新聞に委託した。

二十九日

學友會演奏會開催。

十一月

十一日十四日

學友會主催で、シューバート作歌曲の連續演奏會を開いた。加藤教官就筆の解説パンフレットを發行し、生徒の交互出演によつて、「水車小屋の娘」と「冬の旅」の全曲を演奏、急病で出演できなくなった生徒の代りに田中教官の出演を得た。

十二日十九日

學友會演奏會開催。

二十五日

アメリカ合衆國陸軍省の課長（文官）ハリスン・カー氏（Mr. H. Kett）が民間情報局音楽官クラレンス・デイヴィース氏と同道して本校を視察した。同氏は作曲家で著作權關係の要務と日本・朝鮮の音楽界視察の爲本國政府から短期特派された人で、本校では生徒の演奏・作品等につき參觀した。

二十六日

皇太子並びに三内親王殿下が學習院生徒と共に御來校、午前は秋元（オルガン）、淺野（獨唱）、安川（ピアノ）、巖本（ヴァイオリン）、各教官の演奏を、午後は管絃樂及び合唱（指揮は金子、渡邊兩教官）を下總教官の解説と共に聽かれた。なお、晝食後、校長室で各教官を交えて座談會を催した。

十二月

二日

日比谷公會堂に於いて三時から同聲會・朝日新聞社共催のもとに戦後最初の學校演奏會を行った。

曲目（シューバート生誕一五〇年記念プログラム）

一、管絃樂

指揮 渡邊 曉 雄

（イ）「ロザムンデ」序曲

（ロ）交響曲ロ短調（未完成）

二、獨唱・合唱及び管絃樂

指揮 金子 登

四聲音と管絃樂の爲のミサ曲（變イ長調）

獨唱 S 石田しおり

A 佐々木成子

T 柴田睦陸

B 中山悌一

合唱指揮 柴田睦陸

管絃樂 東京音樂學校管絃樂部

（教官・部員・生徒）

合唱 東京音樂學校生徒

（以上全部シューバート作品）

ソプラノ獨唱は大熊（舊姓藤田）文子教官の豫定であつたが急病の爲卒業生石田君を煩わすことゝなつた。なお當日の解説パンフレットに「東京音樂學校七十年」（本誌に轉載）を片山教官が、曲目解説を加藤教官が執筆した。

會は極めて盛會で、音楽に對するわれ々の純粹な情熱を聴衆に



きゝとつて戴けたのは同慶の至りである。

〔同聲會報〕第二六六号 昭和二十三年四月 五〜七頁

母校だより(昭和二十三年)

二月二十日

卒業並びに學年試験開始(三月五日まで)。

なお二月から五味保義教官(國語)新任。

三月二十日—二十六日

入學試験。

三月二十九日

假入學者發表。(假入學補缺入學者を含む)

志願者數

入學者數

本科

聲樂	八六	一四、他に特三
ピアノ	六〇	一四、他に特一
ヴァイオリン	一五	七、他に特一
チェロ	五	二
オルガン	二	二
管樂	一一	五
作曲	二九	九
以上	合計三〇八	五三、他に特五
寶生流能樂	一一	一
生田流箏曲	九	四

山田流箏曲	四	二
長唄(唄)	三	一
〃(三)	三	一
以上	合計二〇	九

師範科

男	三五	一六
女	一〇一	一九
合計	一三六	三五

(特とあるは外國人特別入學者。志願者數中には特も算入してある)

受験者の實力の程度は昨年度とほぼ同じで、戦前の水準をものぐものもある。中でも作曲は量質共に空前の好成績であつた。但し、師範科の男子は量質共にもう一息の餘地がある。

本年度は實技は一應すぐれていながら、學科が餘り〔に〕も貧弱で假入學さえ許されないものが幾人かあつた。戦時中のかたよつた教育が原因しているかとも思われるが、多くの者は既にそのようなことは克服しているのだから、いつまでも戦争を口實に甘えていることは許されない。

三月三十日

午前十時卒業證書授與式。午前十一時から晝食をはさんで午後四時半まで洋樂の卒業演奏。邦樂は翌三十一日午後一時から行われた。

卒業者數、本科五六名、師範科五一名、本年度の卒業生一〇六名

は戦時中から戦後にかけて、言葉にはつくしがたい苦難を踏み超えて學業を勵み、戦前に劣らない成績を示して卒業した人々である。同聲會の新會員としてこれらの諸君を迎えるに當り、平和の陽光の中に多幸な將來を祝福したいと思う。

四月十二日

午前九時入學並びに始業式。

今學期からハープ科の専任教官として阿部よしる氏が新任された。

五月五日

生徒各クラス別ハイキング。

五月十二日

かねて文部省からの委嘱によつて本校と美術學校との協同で作製中だった藝術大學原案が文部省に提出された。

このいわゆる音樂大學についてはいろいろと誤解もあるようだから多少の解説をしておきたい。

先ず、軽い意味で人は「大學昇格」と言うことを言うが、これは嚴密に言うとは適切でない。學制がもとのままであつたならば、専門學校が大學へと格上げになるわけだが、今回は全學制が精神の上でも形式の上でも更新されるので、實際は高等學校と言ひ、大學と言つても今までのそれらの概念に捕われていたのでは正しい理解は得られない。

我々の學校の場合については言へば、新學制の實施によつて従來の専門學校は全く消滅するから、従つて東京音樂學校は來年四月から新入學を行わず、現在生徒の卒業と共に解消する。そして、新學制

によると學問や藝術の専門的研究は専ら大學と大學院とで行われることになつてゐるから、ここに當然音樂大學が設立されることになる。従つて舊制度内での専門學校と新制度内の大學とを結びつけ比較して「昇格」と言う言葉を用いるのは當を得ない。もつとも大學になれば一般教養學科等が東京音樂學校よりも増加し、入學者の資格も少し上るが、それらは新學制を貫く日本人の知的水準の向上と云う指導原理の線に沿つて生じた一つの結果で、内容的には舊制の大學とは異なるものである。

新學制は明かに日本人の人間改造を意圖している。日本人はただ眞の意味に於けるルネッサンスを経験しなかつたと言ふ前提を是認するならば、我々がいまその中におかれてゐる時代は日本人が新しく「人間」を發見すべき時代である。人間の發見は知性の働きのしに行われ得ない。知性は本來は廣く人間に普遍的なもので、この現實の世界を一つにする希望はただひとつ世界の人間の知性への信賴だけにかかつてゐる。我々日本人が眞の意味でのルネッサンスを経験するために努力する、即ち高い知性の普遍化と言ふことを忘れては新學制は無用の長物となり、日本人は永久に文化國民になり得ないであろう。

藝術大學音樂部案はこう言ふ新學制の精神に沿つて作られてゐる。具體的な内容については原案作成の最大功勞者、城多教務課長の別稿について見られたい。この案についてはいろいろと意見はあろうと思う。

私なども個人的には多少の異つた考えを抱いてゐなくもないが、しかしこの案が、今まであつた東京音樂學校の内容をずると繼

承すると言う事務的な行き方によらず、ともかくも文化的見識を以つて再検討されたいいくつかの痕跡を残していることは正しく評價されなければならない。こう言う行き方は事なかれ主義と異なり、時としてはその決定に勇氣を必要とす〔る〕こともあるものである。

六月五日

午後二時から、國會圖書館開館式に於いて記念演奏を行った。教官・部員・生徒による管絃樂及び生徒合唱、合計一七〇名参加。

六月二十八日―七月二日

本人學試験。

七月十日

本人學者發表本科に二名不合格者があつた

七月十二日―十七日

本科四年試演奏（卒業試験の一部）。

七月十七日

第一學期終業。

今學期中に學友會が數回演奏會を行った。

又、男生徒寄宿舎の建設が急を要する問題となつたので、今學期から種々な方法で資金を集め始めたが、時局柄關係教官及び生徒委員の大きな努力にもかかわらずいまだ全額を充たすには相當の距離があるようである。有爲の英才で宿舎が無い爲に地方から出て來れないと言う青年もあろうかと思う。會員諸氏もできるだけ御援助願いたいと思う。

九月は一日から始業の豫定だが残暑が今から思いやられる。敗戰的現實のきびしさもいよいよ本格化しつつあるようだ。世界の情勢

もこの秋のうちには恐らくは一展開を見るであらう。理性、沈着、正義と眞實への思慕、そして勇氣、我々がこれらのものを必要とすること今日の如きはあるまい。これこそは敗戰が教えた最大の教訓でなければならぬ。

若し人達は實によく勉強しているし、我々も精一杯やつている。學校が休になつた今日、「教えることは學ぶことだ」と言うシェーンベルクの名言をいろいろな意味でかみしめている。

同學諸兄弟の御健闘を祈る。

（長谷川）

〔同聲會報〕第二六七号 昭和二十三年九月 九―一頁

母校だより〔昭和二十三年〕

九月一日

第二學期始業。

十三日

大學設置準備委員會開催。この委員會は東京音樂學校の洋樂及び學科の各料から二名ずつ選出された委員によつて構成され、新大學音樂部の開設に關する準備を行うものである。原則として毎週月曜日を定例集會日とし、作成された原案は學校長主宰の教授會に提出して討議の上決定することになつている。

差當りの問題としては來年四月に入學試験があるものと假定して、その試験方法、課題曲等を決定することである。これは、この日から研究審議を始めたが、各部提出の原案を整理して最終の決定に至るまでに約二カ月を要した。文部省とも連絡の上、本稿就筆の現在（十一月二十五日）印刷中であるから、十一月末には公表され

る豫定である。

全くの新設であるところの、合唱科指揮科樂理科を除き、他の科は従來の東音校で行つて來たものに若干の新し味を加えられたものである。

合唱科は合唱指揮者の養成に主眼がおかれているから、聲樂のみならずピアノの技能も重視されることになつてゐるから、受験者を指導される方はその點を含んでおいて頂きたい。

注目すべきことをしては、二科を同時に受験できることである。

つまり第一志望、第二志望の兩方を受験できるように試験の時間割が組まれているのである。科によつては同時受験のできないものも少しはあるが、それはむしろ稀なケースと考えられるものだけだから、大體は二科目受験ができる。

其の他詳細は公式な發表全文を見られたい。

二十二日

クロイツァー教師の全校生及び校外有志者に対する特別講義第一

一回。これは今後隨時行われる豫定。

二十四日

クラス別ハイキング。

十月四日

學校長交通事故の爲負傷、入院。左ひじ骨折、大腿部打撲。

九日・十六日・十七日

學友會演奏會

二十三日

學校長經過良好で退院さる。

二十五日

東京音樂學校創立七十年記念式を舉行。全國からの卒業生を始め來會者多數參列のうちに學校長式辭、松平參議院議長（代讀）、森戸文部大臣（代讀）、日高學校教育局長、小松同聲會長の祝辭、永年勤續者（氏名別項）の表彰があつて式を閉ぢ、引きつゞき邦樂及び洋樂の記念演奏があつた。

なお、第一一七教室に吉川教官苦心の七十年回想記念展覽會が開かれた。

二十六・七日

同聲會と朝日新聞社共催の記念音樂祭の一部として帝劇に出演。

演奏には邦樂。洋樂の全生徒及び多數教官が參加した。

三十一日

創立七十年記念祭の最終日の行事として學友會主催の大祝賀會を行つた。生徒演劇及び各クラスの趣向をこらした賣店が十五店、教官、職員出演の餘興も行われた。

〔同聲會報〕第二六八号 昭和二十四年二月 一六〜一七頁

母校だより（昭和二十四年）

一月八日

第三學期始業。

二月二十五日

第六十回卒業式。同日に洋樂の卒業演奏。翌二十六日邦樂の卒業演奏。

三月二十一日

新學期始業。

三月二十八日

本校七十週年記念演奏を行い、兩陛下の行幸を仰いだ。午後一時半——四時十五分までの間に邦樂と洋樂とを鑑賞された。

大學入試については全國の新制大學一齊に六月八日（前期校）とようやく決定したものの東京藝術大學音樂學部の入試は邦樂科を研究所で研究するか學部に入れるかと言う兩案をめぐる混亂から延期となつた。

その後、衆議院文部委員會の要望により、邦樂科を學部に入れることに決定するに至り、六月十八日附を以つて小宮學校長は辭職され、同時に邦樂科の全教官の辭職も發令となつた。

小宮校長辭任後は、たまたま舊制から新制への切り換え時に際會して、人事は大學本位に行われることになつたので、東音校全教官は數回の合議の結果、できるだけ美術部と歩調を合わせて進むことを申合わせ、美術部と連絡の上、「天下りの人事を避け、學校側の意圖をも尊重されたい」と言う基本的な線を明瞭にする爲の申入れを然るべき筋に行つた。そして、學長には上野直昭氏が六月一日附で就任。音樂・美術兩學部長はそれぞれ部内から出すことになり、音樂學部は五名の候補者を互選、最後の決定は學長に一任した結果、七月二十七日加藤成之教官（美學・音樂史擔任）の音樂學部長が發令された。

前校長小宮豐隆氏に對しては六月二十二日全校をあげての盛大な送別式が催され、教官職員・生徒からそれぞれ記念品を贈つて惜別の意を表した。

他方新制大學の入試は洋樂關係のみを切り離して六月下旬から行うことになり、邦樂については、準備完了と共に九月早々に試験を行うことになつた。

六月二十六日——七月七日

大學入試。

七月九日

合格者發表。次表のカッコ内は入學志願者數。

作曲	一〇（二六）	チェロ	二（三）
聲樂	一三（六三）	管	一（六）
合唱	三八（七八）	指揮	〇（二）
ピアノ	一〇（二〇）	西史	一（二〇）
オルガン	三（四）	東史	〇（一）
ハープ	一（一）	美學	〇（二四）
ヴァイオリン	二（四）	理論	七（二〇）
ヴィオラ	一（二）	特入（聲）	一（一）
合計	八八（二七三）		

七月十五日

新制東京藝術大學音樂學部入學式。

但し、舊制東京音樂學校は現在學生の卒業まで竝立存続する。大學の方は豫算關係で専任教官は殆どなく、大部分の教官は舊制の東京校から兼任の形をとる。

七月三十日

大學の授業をひとまず中止し休暇に入る。大學の方の第一期は十一月までである。舊制の方は六月二十四日から既に休暇に入つてい

る。

〔同聲會報〕第二六九号 昭和二十四年十月 二頁

母校だより(昭和二十四年)

九月一日

第二學期始業。

十月四日

東京藝術大學開學式を午前十時から音樂學部奏樂堂に行う。上野學長の式辭、高瀬文部大臣、日本藝術院長、學士院長の祝辭があつた後、合唱誕生の讚歌(シューベルト)管絃樂大學祝典序曲(ブラームス)の演奏があつて式を閉ぢた。美術學部では物故教官の作品卒業製作品、繪畫彫刻百數十點を陳列して展覽に供した。

〔以下省略〕

〔同聲會報〕第二七〇号 昭和二十五年四月 三頁

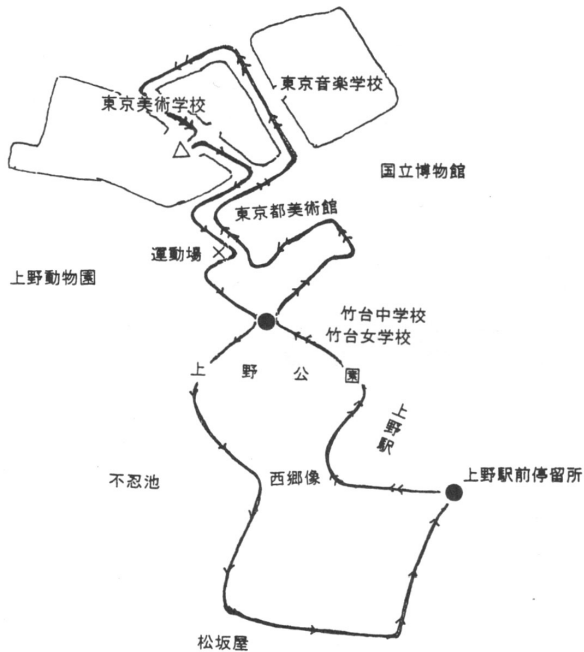
### 戦後の学校行事

#### (一) 第一回芸術祭

第一回芸術祭は、昭和二十一年十一月七日から十二日にかけて東京音楽学校・東京美術学校が合同で、教官と生徒が一つになつて催された。この時のプログラムについては本百年史『演奏会篇第二卷』七六〇〜七七二頁を参照されたい。また『美術学校篇第三卷』一〇三二〜一〇四二頁にも当時の写真や新聞記事が掲載されている。

本項においては学内に保管されていた『昭和二十一年度 藝術祭關係書類 準備委員長 藤』と表書きされた綴りより、前掲の既刊を補う資料をまとめておく。

また当時の教授会における芸術祭関連記録もあわせて掲載する。



第1回芸術祭  
仮装行列コース内訳

- 往路
- × 運動会場
- クライマックスポイント
- ← 復路
- △ ファイアーストーム

※「美術学校篇第三卷」には、  
実際は銀座まで遠征したと  
記されている。

〔原資料中の路図をもとに作成〕

#### 仮装行列コース内訳

日時 競技 十一月十二日 二時—四時